
臨床社会学の方法

(31) 男らしさを「聴く」

—他者をとおして自己の欲望を実現させるコントロール行動の意識と態度—

中村 正

はじめに—声を聴いてみると

男たちと脱暴力への対話をしていると男性性の意識がよく見えてくる。特徴的だと思えるグループワークでの発言をいくつか紹介し、男らしさの声として社会と関わらせながら聴き、暴力を肯定して生きている男たちのワードがつくるワールドをみていこう。

1. 名誉—「そんなに褒めないでください。」

グループワークでの発言が前向きであり、参加態度が真面目だったので、肯定的なコメント (以下、下線は筆者による) をしたところ、「そんなに褒めないでください。」という男性がいた。これは謙遜ではない。この言い方にはトゲがある。グループワークのファシリテーターを批判しているのだ。「あなたは私を褒めるに値する男性なのか。」といている。「そんなことで褒められるほど安っぽい男ではない。」とも考えている。「そんなこと」というのは脱暴力プログラムのことを指していて、児童相談所が勧めた男親塾なんかで「勉強」させられ、そこへの参加態度がよいことぐらいでという意味である。少年刑務所で性犯罪再犯防止プログラムに関与していたときにも同じような発言を受刑者から聞いた。「こんなプロ

グラムで解決できるのですか？」と。

褒めて欲しくないという意識の手がかりは「名誉」の観念にある。褒められることは「名誉」なことだ。しかしそうした「名誉」を与えてくれるのは自分よりも権威と地位のある者からでなければならないと伝統的な男性性意識は考える。そうしないと自分の「名誉」が誇れず、面子(メンツ)が保てないからである。すべてが男性的な力関係の秩序の中に納められている。褒めることと子育ての関係も同じだ。この男性性意識がバリアーになり、肯定的に他者と関わることができない。むしろ叱責だけが前にでる「指導的な子育て」になっていく。

また、この意識は秩序の下の者から発信されることもある。この意識を持つことでパワーが実感できるからだ。従属的な地位にある者が上の者に抵抗する際、男性性をたよりに威信を保つことができる。こうなると、地位あるものは脅威を感じるかもしれない。この力学を元にした「モビング mobbing」という現象がある。場合によっては下からの、複数人による攻撃、つまり集団いじめである。

ここから大きな社会問題につながる。「名誉殺人 (honor killings)」である。女性が、

親や親戚が認めない相手と交際や結婚をした場合、家族や親族の名誉を傷つけられたことになる。この場合、家族が女性本人やその相手を殺害することができる。つまり女性の身体は公共的な管理の対象なのである。これは女性差別の強い国や地域で報告されている。国連人権高等弁務官は世界で毎年約 5000 人の女性が「名誉殺人」で殺害されていると発表した(2010 年)。この背景には女性を従えられない男性は地域社会において男性としての尊厳を失ってしまうという男性優位の規範がある。父のための名誉共同体の存在である。これを支える「名誉文化」がある。

ローカルな大阪で開催しているグループワークでの小さなつぶやきだった「褒めないで欲しい」という言葉の裏には、「俺をなめるな」という感覚を窓口にして暗澹たる男性主導型共同体がみえてくる。

さらにこれは次のような議論とも重なる。通例は「謙遜、気さくさ、丁寧」と訳される *condescension* について論じられていることである。

微細な権力作用を読み解く分析枠組みの提示にあたって、*condescension* という言葉に注目したい。*condescension* とは、両義的な意味のある言葉で、良い意味では、へりくだり、謙遜、腰の低さ、丁寧を意味し、悪い意味では、人を見下すこと、恩着せがましいことを意味する。Oxford English Dictionary には、「自発的な犠牲によって、優位であることがもつ特権をさしあたり放棄すること、身分や地位が異なることを丁寧に無視すること」であり、同時に、「劣ったものに対する愛想の良さや恩着せがましさを意味するとある・・・一方で、対等の立場に立ってへりくだる態度を示し、他方

で、恩着せがましさを偉そうな態度を示す *condescension* の両義性の背景には、*condescension* が認識される状況に関わる人びとの間の上下関係や権力関係があると考えられる。上下関係や権力関係を背景として、*condescension* の言動を差し向ける者と、差し向けられる者のどちらのパースペクティブをとるかによって、あるひとつの言動が反対の意味をとることを示す。*condescension* は、権力関係のダイナミズムにかななる効果を及ぼすかによって、善意とも侮辱とも捉えられるような性質の言葉であると言える。ある者と別の者が権力関係におかれている場合、権力を持つ者による「善意ある」言葉や行動が、その言動が向けられた者にとっては、自らが劣っていることを暗示的に確認させられる機会となることがある。そのような効果をもたらすものとして、*condescension* の言動を理解することができる。権力関係にある場合、権力を持つ者からそうでない者に向けられる善意ある言動は、場合によっては、象徴的な暴力として作用することがある。(http://subsite.icu.ac.jp/cgs/docs/CGSjnl011_01f_Toraiwa.pdf、虎岩朋加「日本の留学生政策と実践に内在する象徴暴力」2020 年 11 月 30 日最終アクセス)。

褒めることの拒否だけではなく、アサーションのコミュニケーションや多様性(ダイバーシティ)の尊重も理解されにくい。伝統的な男性性はこうしたことと相性が悪いようだ。他者との関係づけが自己中心的だからだろう。マウンティング行動とも関係している。発言の背後には無意識の男性性が横たわる。日常の相互作用に社会秩序を読み取っていく社会学の研究方法は脱暴力臨床や臨床社会学の展開にとっても有益である。

2. 脱力ー「脱暴力のグループワークにくると脱力していくようで疲れる。」

「脱暴力のグループワークにくると脱力していくようで疲れる。」と感想をもらった男性がいた。妻に指示されて参加していた。男の子三人の父親で、まだ30代だった。スポーティな出で立ちの筋肉質な印象の男性だった。会社員である。威圧的な態度で突っ張っている様子も見えてくる。DVで保護命令が発出されるような暴力ではなかったようだが、妻はその威圧的な態度に辟易していたようで、グループワークに参加することを指示したという。それでも参加してくるだけ立派だ。とはいえ、いやいやしぶしぶの参加だったのでこうした感想をもらった。家でも、会社でも、傍若無人な態度なのだろう。男親塾では、暴力行動としてのパワーのさらに背後にあるコントロール行動についても話題にし、パワーによるのではないコミュニケーション的行動を勧めていることもあり、彼の男性的な思考と流儀からするとすべて腑に落ちなかった様子である。

「IメッセージとYouメッセージ」、「レポートトークとラポートトーク」、「アサーショントレーニング」等のコミュニケーション練習をしたが、これがまどろっこしいと感じたらしい。彼が保持する「力の感覚」は、マッチョな身体感覚や関係性のコントロール感に根ざしている。ここが根っこにあるので理解が進まない。そうではない身体感覚や関係性のあり方に入れ替えていく必要がある。

しかし時間がかかりそう。他の男性たちの経験からすると、力の感覚を保つために身体が疼くらしい。その場合は、筋トレ

などの取り組みが有効であるという。男性的身体にはボクシング、ブレイクダンス、スケボー、格闘技などのエクササイズ系が奏功するという男性たちが多い。ストイックに自分自身にたがをはめるようでもいいのだろう。こうした行動をとおしてセルフコントロール力の向上が計られていく。しかし、こうした力の感覚を、家族をはじめとした親密な関係性に持ち込むと双方が混乱する。

では、親密な関係で発揮できるようなパワーの感覚や観念とはどんなもので、それを養うにはどうすればよいのだろうか。グループワークで話題にした。パワーの感覚や観念が他者と対峙するような競合的な想定の中にあることが浮かび上がる。パワーの感覚は他者と協働することではなさそう。そこで幼い頃からの育ちのなかで暴力的でなく「すごい！」と思えた父親のエピソードをたくさんだしてもらうことにした。「本当の人間的なパワー」と仮に名付けた。

話されたエピソードは、幼い頃の父親との記憶が多かった。よい男性性や父性の思い出をたどることとした。ある男性がこんな話をしてくれた。幼い頃は田舎暮らしだったという。おもちゃやゲームはなく、父親が竹とんぼや竹馬を器用につくってくれた思い出がある。一緒に遊んでいた友だちたちが「おまえの親父、すげえな！」と言ってくれたことが誇らしかったというエピソードが話された。暴力をふるっているばかりではない父親の、肯定的な思い出がだされてくる。これはマッチョな力ではなく、まったく異なる種類の「力」に満ちているような話だとコメントをした。他の男たち

からもこれとよく似たことが思い出された。

パワーとしての力ではなく、ストレンガスとしての力とでもいえるだろう。前者の観念からするとパワーは物理的な力の行使としての暴力につながりやすい。男親塾はパワーの意味を変えていくことを意図している。暴力ではないパワーの感覚をこうした体験から相互に学んでいくことをめざしている。「脱暴力すると力がなくなっていくようだ」という言葉を発してくれたので、そこを穴埋めするための別の作業が必要になるのだと気づききっかけになった発言だ。当の男性、その点から褒めたら、多少の笑みはこぼれたがまだ十分に納得はできていないようだった。

3. 友情—「暴力を振るい合えるほどの関係なのです。」「喧嘩しない夫婦はいますか？」

「暴力を振るい合えるほどの関係なのです。」という発言があつた。これは子ども期の記憶に根ざした意識である。男性の育ちの過程にある伝統的な男らしさにつきものの競争感覚や連帯意識の反映である。わかりやすいのは、スポーツ根性漫画によく登場する関係だ。あえていば少年ジャンプ的な雑誌漫画の世界である。喧嘩の後の友情が想定され、思春期少年の心象風景のように描かれてきた。女性との成熟した情愛的な交流の前に、児童期から青年期にかけての同性同士の情緒的交流を含めた友人関係がある。ギャングエイジのグループ、チャムシップ・グループ、青年期にかけてのピア・グループといった同性同士のつながりをおして体験される感情的な絆がある。

家族以外の仲間集団体験の重要性である。長じて、親密な関係という二者間系に再現、

投影される。なかでも同性同士の関係には「モデルとライバル関係の共存」がある。ここには同性愛的な面も含まれる。異性愛主義を前提とした親密な関係への通過点のように位置づけることはすべきではないが、親密な関係へと移行していく感情構築体験としてこうした同性同士の関係性がある。

「モデルとライバル関係」は同志的でホモソーシャルな関係となりやすい。ギャングエイジは行動に、チャムシップは言葉を介して構成されると指摘されてきた。行動的な特性は反抗的な文化に染まりやすい。言葉をおした一体感の確保は、のちに私が「メンズトーク」と名付けるようなものに近い。たとえば性的な冗談をおして男性同士の絆を確認することである。ジェンダー秩序や家父長制的意識が流れ込み、ミソジニー（女性蔑視）の意識へと展開していく。「メンズトーク」は大人になっても職場の飲み会などでよく見られる光景だろう。ホモソーシャルな意識と態度とミソジニーがこのワードから構築されていくので、要注意である。

加害男性たちは、同じような言い方をする。「愛しているからこそ暴力を振るう。」、「暴力もコミュニケーションのひとつ。」、「単なる夫婦喧嘩ですよ。喧嘩しない夫婦はいますか？」と語る。一体感、連帯感、つながりなどの言葉と近いところで親密な関係が意識されている。都合のよい感情規則なので被害者には理解できない。

DVや虐待の理解にとって、青年となる前の男性同士の関係における感情的交流の重要性がわかる発言だ。

4. 監禁と所有－「僕の好みの女性になってほしい。」

ケースによっては被害を受けている妻の話聞くこともある。そうすると関係の内実がみえてくる。愛情という名の下、身体的暴力とは異なる体験を語ってくれた。「自分のものを買うときにいつも一緒に付いてくる。『僕の好みの女性になってほしい』と言う。自分が自分でなくなっていく感じがする。」「交通の便の良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。『運転が下手だから』って言う。だからいつも彼の車で行動することになる。」と。

これらはコントロール行動である。モラルハラスメントという。モラルハラスメントのことを中国語では「冷暴力」と表記すると中国の留学生が教えてくれた。漢字のリアルな表現力である。

モラルハラスメントはフランスの精神科医、マリー＝フランス・イルゴイエヌが展開した概念である。加害者が相手を不安に陥れるためによく使う方法としてモラルハラスメントを整理し、例示している。「相手の意見や趣味、考えを嘲弄し、確信を揺るがせる。相手に言葉をかけない。人前で笑い者にする。他人の前で悪口を言う。釈明する機会を奪う。相手の欠陥をからかう。不愉快なほめかしをしておいて、それがどういうことか説明しない。相手の判断力や決定に疑いをさしはさむ。」である(『モラル・ハラスメント』(マリー＝フランス・イルゴイエヌ著・高野優訳/紀伊国屋書店)。

現在では、こうした概念をもとにして暴力の再定義の議論がされている。親密な関

係における暴力の定義は拡張されてきた。たとえば「イスタンブール条約(欧州評議会)」(女性に対する暴力及びドメスティック・バイオレンスの防止に関する欧州評議会条約、2011年)という)がある。これはジェンダーの暴力としての定義が前面にでている(森秀勲「欧州評議会イスタンブール条約－DV及び女性に対する暴力への対応－」、『立法と調査』2020.7、No.425、参議院常任委員会調査室・特別調査室)。

さらに英国でもDVの定義に追加された事項がある。心理的暴力である。「重大犯罪法(serious crime act)の2015年改正で「家庭内虐待(Domestic Abuse)として、「親密な、あるいは家族関係においてコントロールするあるいは強いる行動」が追記された。いくつか例示されている。「友人や家族から孤立させる」、「デジタルツールを用いて監視する」、「(どこに行くか、誰と会うか、着るもの、寝る時間など)日常生活を統制する」、「お前は価値のないやつだと繰り返して言う」、「辱める行為・相手に自己非難を強いる」、「プライバシーを明かすと脅す」である。

こうした定義の拡張は、親密な関係における暴力をCoercive Controlとして位置づける研究に裏打ちされている。スタークは、「脅迫、監視、貶め、コントロール、孤立」をDVの定義とすべきだという(Stark,E.2007,*Coercive Control: How Men Entrap Women in Personal Life*, Oxford University Press)。

こうした動向の中心にあることは、相手の心と行動をコントロールすることに焦点を当てている点である。

筆者もこんな体験をした。女子学生から

の相談である。木曜日の午後1時からの授業の前に携帯メールがあったという。「俺の
とっている講義が休講になったのでこれから
会いたい。」と。彼女はこれからはじまる
筆者の講義をとっている。それは「社会病
理学」で暴力の話をした直後だった。彼女
は相談に来たくらいなので休まずに授業に
でている。きちんとノーといえたはずだ。
しかしわだかまりがあり悩んだことに悩ん
でいるということ話を話に来てくれた。これ
はモラルハラスメントの「被害性」の特徴
である。愛情が薄いと思われなくかという
気持ちが心をよぎったという。相手は一方
的である。彼女の時間に勝手に侵入してい
るともいえる。「あなたも同じようなこと
をしたことはあるか」と筆者は聞いた。し
たことはないという。彼女はきちんと彼の
時間や生活に配慮している。恋人同士なら
時間割くらいつかんでいるからだ。この次
元ですすでに対等ではない。彼女は相手の
時間に侵入していない。しかし感情面で悩
んだ自分の扱いに困惑していたのだ。もち
ろん彼の行動は暴力そのものではない。と
はいえ彼女の心に波紋を招いた。見えな
いけれど、ざわつく行動である。愛情規
範としてマインドがコントロールされてい
るともいえる。モラルハラスメントによ
る被害性の特徴がここにある。

5. 正義—「暴力かも知れませんが、これは正義です。」

暴力加害者に「これは正義です。」とい
う発言は多い。しつけのためにもやむを
得ないことだったとも言う。加害者は暴
力には理由があると考えている。社会も
同じ考えをもっている。国家が戦争を起
こすことも

同じだろう。暴力は常に正当化されて
きた。男性の身近な対人関係や家族の
つながりから戦争への意味づけまで同
心円的に関連している意識だ。

こうしたことは身近にある。コロナ禍
の、いわゆる「自粛警察」、「マスク警
察」である。時代が人間の攻撃性を顕
在化させている。同じことは以前から
SNSでもみられる。中傷が激化してい
る。たとえば性被害を实名で告発した
ジャーナリストの伊藤詩織さんへの攻
撃、自死した女子プロレスラーの木村
花さんの番組における行動への中傷が
記憶に新しい。

同じ理由だが、以前アンパンマンのこ
とを本マガジンにも書いた(第15号)。「
アンパンマンをみたくない!」という息
子のエピソードだった。再掲しておく。

母子でシェルターに避難したことがある
という若い母親のDV被害体験を聞いた。
心を痛めたのはアンパンマンをみた
くないという5歳の息子の話だった。
アンパンチというシーンが夫の暴力場
面と重なるのだという。子どもたちが
好きなアニメをみることができない程
に面前で暴力を振るっていたのかと思
うと聞いているだけで辛くなった。さ
らに妻にはその文脈も辛いのではない
かと心の中で思ったが質問はできな
かった。アンパンマンの暴力は、暴
力が行使される際の常として、バイ
キンマンという悪をやっつける「正
義のための暴力」として使われる。
暴力を振るう夫も同じような言
い方をする。「殴らせるお前が悪い」と
・・・男性の暴力を支える信念が垣
間見える(アンパンマンの名誉のため
に一言。アンパンマンは自己犠牲的
でもある。少々複雑なつくりになって
いるが殴る人は都合のよいところだ
けを真似る)。この正義の暴力とい
う意味づけは、社会のなかではよく
ある

記号(勸善懲惡物語、テロ対策、暴力で強くなるなど)として流通し、個々人の動機として汲み上げられる。暴力、いじめ、ハラスメント、虐待、体罰などの対人暴力を正当化する説明として作用する動機の語彙となっている。もちろんそれは加害者にとっての正義なので身勝手な正義である。特に男性の暴力加害者によくみられる語彙である。彼らは「糺すこと」が好きである。その基準は自らが設定する。警察になりたがるだけでもいえようか。コントロール感が満たせるからだろう。他者非難も好む。怒りの火種を至る所からみつめてくる。怒りは自らを活性化させるてっとり早い感情だからである。

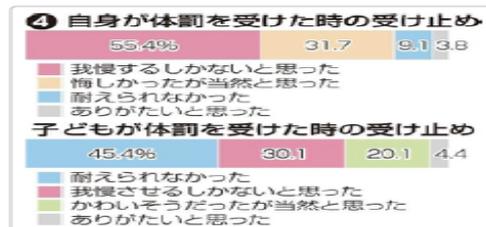
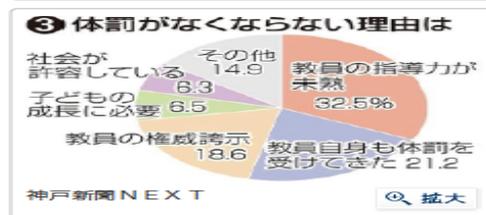
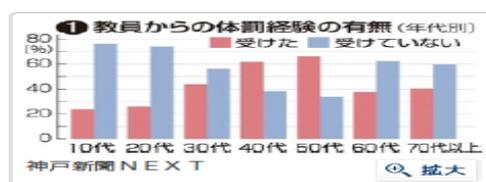
この発言は、社会のなかに暴力を肯定する意識が存在していることを示すものだ。脱暴力に向かう行動変容にとっては無視できない声である。

6. 愛のムチー「暴力は役に立った。」

「暴力を振るわれたけどそれを乗り越えてきた自分があるんです。」「罰としての暴力を受けてきたのですがそれは役立ちました。」と話す男性は多い。これは体罰を容認する社会の意識とも相関している。こんなデータがある。

体罰を振るい、生徒を骨折させた教師が犯罪として起訴された事件があり、神戸新聞がこのテーマで調査をした。「体罰を受けても、教員の思いを肯定的に受け止めた人ほど、体罰を容認する傾向が見られた。受けた体罰を「ありがたいと思った」人のうち、体罰を「必要」「程度や理由によっては必要」としたのは82%に達した。「悔しかったが当然と思った」とした人でも容認派は60%に上った。子どもを持つ親のうち2割

が「子どもが体罰を受けた」とし、体罰の時期としては2010年代後半から現在にかけても多く、体罰は根強く残っている可能性がうかがえる。ただ、自身が体罰を受けて「耐えられなかった」とした人は9%なのに、子どもが受けた時には45%となり、36ポイントも増えた。」(2020/11/14付け神戸新聞NEXT「先生の暴力・本紙アンケート詳報」(市民調査))。



暴力を肯定していく思考と行動のメカニズムがこのように機能している。体罰を否定していない社会ではこの発言のように暴力を再生産されていく。暴力の連鎖は愛や指導の名の下に語られていく。

7. 嫉妬—「それは誰だったのか？」

被害を受けた妻たちがさらに語る。「『習い事をしている』と言うと、『それは男性から教わるのか』って聞いてくる」、「『同窓会に行く』と言うと嫌な顔をする」、「病院にいくと男性の医師だったかと聞いてくる」と。

嫉妬である。所有の意識と裏腹である。束縛的な愛情もあるかも知れないが、妻たちが苦痛を感じている点が重要だ。虐待で子どもが保護された父母の話で、主要には妻への態度である。子どもにはどんな態度だったのかについては聞いていないが、嫉妬心の強い父親と子どもの関係にもこうした意識はあるだろう。

もはや情熱的な恋愛でないだろう。嫉妬心が常識を越えるとストーキングになる。

「ストーキング行為規制法」では程度の深刻なものが例示されている。法律の定義の「つきまとい等」とは、「特定の者に対する恋愛感情その他の好意の感情又はそれが満たされなかったことに対する怨恨の感情を充足する目的で、その特定の者又はその家族等に対して行うこと」とされている。この発言の延長線上にはこうしたストーキング行為がある。以下、列記しておこう。

「つきまとい、待ち伏せ・押し掛け、うろつき」、「監視していると告げる行為」がある。さらに、「お前をいつも監視しているぞ」と告げる。帰宅した直後に「お帰りなさい」等と電話する。「面会や交際の要求」もある。面会や交際、復縁等義務のないことを求めたり、贈り物を受け取るように要求するのだ。「乱暴な言動」を発する。大声で「バカヤロー」と怒鳴り、「コノヤロー」と粗暴な内容のメールを送信することもある。家の

前で車のクラクションを鳴らしたりする。無言電話をかける。携帯電話や会社、自宅に何度も電話をかけてくる。また、「汚物等の送付」をする。汚物や動物の死体等、不快感や嫌悪感を与えるものを自宅や職場等に送り付ける。そして「名誉を傷つける」。中傷したり名誉を傷付けるような内容を告げたりメールを送るなどする。さらに「性的しゅう恥心」を侵害する。わいせつな写真を自宅等に送り付け、電話や手紙で卑わいな言葉を告げ恥しめようとする。

ストーキングの背景にある嫉妬は、俺のものだという所有の意識の裏返しである。先に紹介した監禁ともよく似ている。

8. トラウマ的な絆—「彼といると安心する。」という被害者

「DVを受けているのに彼といる方が安全だと思うような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着く。」として、元の関係に戻ることが多いという。「在宅DV」と言われるように、一時保護の後に自宅に帰る女性が多い。自立に至ることもあるが、そうではなく元の関係のなかに舞い戻る。しかしその帰住先の環境は変わらず、加害者対策も講じられていないので男性は変化していない。保護された後の展望がないと、やはり現状に戻るしかない。

ここには「トラウマ性の絆(Traumatic Bonding)」が垣間見える。これを加害者は利用し、暴力を正当化する。暴力や加害者との同一化という。虐待されている子どもや被害者が、自らの安全の可否を握る虐待者に同調することで、なんとか自分を守る

うとする行動のことである。

脱暴力のグループワークに参加する男性の妻にもこうした被害者がいる。「私がいなければこの人はダメになってしまうんです。」、「私がなんとかしてあげないといけません。」といいながら関係性を続けていく。人間関係そのものに依存するアディクション(関係依存症)ともいえる。自分自身を大切にし、自分自身の問題に向き合うよりも、身近な他人の世話に気を遣うようにコントロールされている。

9. 直面化—「俺たち子育てしていないよな。」

虐待対応では、子育て支援の前にすべきことがある。父親の脱暴力の課題である。それは面前DVの課題の切り取り方ともいえる。男親塾、以前は「お父さんのための子育て支援塾」としていた。これに対して拒否感がだされた。ある日、男性たちが語りだした。

「この名前だと参加しにくい。」

「どうして？」と聞いた。

「俺たち子育てしていないよな。」(⇒直面化に必要な核心となる覚知だった)

「だったら<おとこ塾>はどうだ。」

「でも、それはマッチョなおとこを育成するみたいだ。」

「親だけど、でもおとこ性がまずは問題だな。」

「子育てしていないのに虐待するって、じゃあその暴力は何？」

「妻との関係はどうなの？」と聞いた。

「子育てやらせればなしだよな。」

「DVはしなかったけど、きちんと育てられないことにはイライラしていたな。」

「DVの定義も変化してるよ。」と私。

子育てしていないのに暴力を振るうことへの気づきはDVや面前DVの理解につながる。父親へのペアレンティング教育の前に、妻とのパートナーシップが問題だと理解してもらおう。彼らの暴力が子育てに随伴するものではないとすると、では何に随伴するのか。男性性と父性に随伴する行動と考えていくこととした。男性であることと父親であることに宿る暴力こそが乗り越えの対象だと位置づけ、男たちの意見をもとにして「男親塾」と名付けた。こうして脱暴力の取り組みが本格化した。

虐待の起こる場面は家族(親密圏)が多い。その虐待は男性たちのケア行動に内在するのではない。異なる原理がケアに持ち込まれている。男性性とケアの関連が焦点である。女性性・母性が虐待に関わることも異なる。家族制度がこれを媒介にしている。しかし、すべての男性・父親がそうなのではないので、暴力を振るう個人のパーソナルな要素をも視野にいれる。とはいえ、心理化しないようにも配慮する。そこで別の補助線をひく。それが男性性ジェンダーと生育歴の問題である。二つを重ねると男性の暴力という視点の重要性が浮かぶ(中村正「男たちの『暴力神話』と脱暴力臨床論—家庭内暴力の加害者心理の理解をもとにして—」、『子どもの虐待とネグレクト』第22巻第1号、日本子ども虐待防止学会、2020年)。

男性の暴力としての課題を虐待対策の一環に組み込むべきことへと当事者の男性たちとの対話をとおして気づいていった。DVと虐待の関係はずいぶんと以前から存在している。千葉県野田市の事件だけではない。さらに日本の父親は一般的にみて子育てに

関係する時間が少ない。イクメンという名付けが必要な程に無関心である。イクメンとしてもてはやすことがそもそも不自然である。そう考えると虐待する父親だけに子育てのためのペアレンティングをすることはおかしい事でもある。日本の父親全般がネグレクトなのだから、虐待父親だけに養育力向上を施すことは矛盾である。まずは、家族関係を媒介にして、ペアレンティングとしての課題ではないパートナーシップの課題としての虐待の再定義を行うことへと課題を定式化した。そうすると、さしあたり子育て支援に焦点を当てるのではなく、男性性の問題に焦点を当てるべきことになる。注力すべきはそこにあるので「子育てをしない方がよい」という局面もありうることになる。男性へのペアレンティングには注意が必要なのだ。

さらに、筆者は、親密な関係における暴力は、対象にかかわろうとする主体の欲求がもとになっていると把握している。コントロール行動に焦点を当てるということは、対象となった他者をとおして自らの欲望を実現させることに他ならない。親密な関係性という意識がそれを正当化させる。元の関係に戻ってしまう被害者の心理もここに根ざす。これらは加害者対応の内容と被害者の自立支援に欠かせない配慮点である。

男性相談としての彼らとの対話には困りごとを聴くことが奏功する。問題解決型の対話ができ、男親塾へと至った例である。

まとめ—他者をとおして自己の欲望を実現するコントロール行動

まとめておこう。男らしさの声を聴くことで見えてきたのは、背後に横たわる男性

性の文化である。暴力を肯定する意味の貯水池のようである。暴力を定義すれば、身体的暴力も含めてさらに広く、「他者をとおして自らの欲望を実現させようとする行動」となる。つまりコントロール行動である。男性に限らないが、身体的で物理的な力の行使とも重なり、ジェンダー秩序や家族制度という社会的な諸力が男女には非対称に作用することもあり、暴力性をもちやすい男性性とコントロール行動という面に注目をしている。

まずは脱暴力を目標にしたパートナーシップ構築を目指していくことになる。この関係は家族をつくる以前からの、同性同士の関係も影響している。マウンティング的なモデルとライバル関係が思春期の男性同士のなかにある。男性の育ちのなかに暴力生成の契機が複数あるとすると男性問題の射程は広がる。

紙幅の関係で議論できていないことは、ここで紹介したような、男たちの「地」としてのナラティブの外部にある「囟」としての無意識の男性性であり、ジェンダー表象としての社会・文化のことである。周囲にはそれらを聴く力が必要となる。これは男性相談や加害者対策・暴力臨床とは何かという問いを超える男性性研究のスリリングなテーマである。

社会病理学・臨床社会学・男性問題研究
なかむらただし/立命館大学教授
(2020年11月30日受理)